

第 66 回 日本 P T A 全国研究大会 新潟大会 報告書

富士市 P T A 連絡協議会

副会長 大窪 智美

教育は未来を拓く 新潟発 米百俵の精神！  
～新潟につどい、語ろう 未来のひとづくり～

平成 30 年 8 月 24 日(金)25 日(土)の二日間日本 P T A 全国研究大会 新潟大会に参加させて頂きました。一日目は分科会が新潟県内 10 カ所で行われ、富士市 P T A は新発田市の特別第一分科会に参加しました。「いじめ」心の声に気付くには ～見逃さないために出来ること～ を研究課題として

基調講演に 国立大学法人鳴門教育大学教職大学院教授 鳴門教育大学いじめ防止支援機構長である阿形恒秀氏を迎え 我が子のいじめに親としてどうかかわるか ～「仲間」と「自立」をキーワードに～ の公演を聞きました。

二学期になって転入してきたセツちゃんがいじめに遭っていることを父母に話す娘の加奈子。加奈子は、「みんな、セツちゃんのこと、いじめているわけじゃない。嫌っているだけ、いじめは悪いことだけど、誰かを嫌いになるのは個人の自由。『いじめをやめろ』とは言えるけど、『あの子を嫌いになるな』なんて言えない。」といい、運動会の創作ダンスの変更になった振り付けを教えてもらえなかったセツちゃんは、一人違う振り付けで踊ることになったと話した時も、「嫌いだから、振り付けが変わっても教えなかった。嫌いだから、笑う。嫌いだからシカトする。しょうがない…。」自分がセツちゃんだったら…。加奈子だったら…。自分がセツちゃんの親だったら…。加奈子の親だったら…。と考えながら聞いていた時、思い切り頭を殴られたかの様な、何と言い表したらいいのか分からない強烈な衝撃・痛み・苦しみ・悲しみ・切なさを感じた。それは、加奈子の両親が運動会でダンスをしている娘を見た時の話。みんなと明らかに違う振り付けをして、ひとり浮いているのは娘の加奈子。そう、セツちゃんは加奈子。両親は担任に話を聞くが、振り付けをど忘れてしまったと本人が言っていること。そして、セツちゃんという転校生はいないことも分かる。私は頭が真っ白になり、ただただ涙しながら話を聞いていました。加奈子はその後もセツちゃんの話をし続けている。自分だったらどうすればいいのか？難しい…。川に流すと、娘の不幸を全て持っていってくれる人形だという『身代わり雛』に父親が出会い、加奈子と一緒に流しに行く。加奈子が「流しても、いじめ、止まんないよ。そんなに現実って、甘くないもん」と言うが、それに対して父は「現実は厳しいのだ。大人も、子どもも」と言う。加奈子は、『身代わり雛』を水に浮かべる。ゆっくり流れていく雛に手を振り、顔を手で覆う。

父親は、セツちゃんは娘であることを本人に聞いたわけでも言ったわけでもなく、加奈子も自分の事であると親に言ったわけでもない。なのに、『身代わり雛』によって互いの状況・気持ち・思いなど、たくさん事が伝わり、親子ひとつになったのだと思います。これが、自分の身に起きたら…。自分の居場所を守るために必死に嘘をつき、認めようとしめない。そんな子供に気付いてあげられるのか、気づいた時どうすればいいのか…。たくさん泣いて、たくさん考えさせられる講演でした。